

イタリア北部における羊の移牧にみる“日常”と“非日常” “Ordinary” and “Extraordinary” on Tourism through Transhumance of Sheep in the Northern Part of Italy

白 坂 蕃*
SHIRASAKA, Shigeru

Abstract: In many regions of the world, the livestock industry represents the only possible kind of land use as a result of severe or hard climatic conditions. Transhumance is a typical subsistence of livestock industry that uses the climatic difference between lowlands and highlands. There are many types of transhumance in the world. Ascending transhumance has its base ranch and winter ranges in the plains or foothills and uses summer ranges in the mountains. The existence of transhumance is associated with special natural and economic environmental conditions. The most important factor is the natural difference in climate and vegetation between lowlands and mountain regions. Transhumance continues to exist in many regions of the world.

Vernagt is located in the Mediterranean climate zone that has dry summers and does not have enough pasture to feed livestock because of high altitude. Therefore, the transhumance of sheep (about 2,000 head) has been practiced between Vernagt and Niedertal (Austria). In 1415, the association of transhumance of sheep (*Interessengemeinschaft*) was founded in Vernagt and concluded the contract to use 6,000 ha for three months in summer (between mid-June and mid-September) in Vent which is a permanent residence village near Niedertal. The association members hold a meeting (*Almrechnung*) in winter and divide the profit from pasturing; each member gets only a few Japanese Yen after paying all costs including shepherds. However, they say, “the transhumance of sheep is our pride (Stolz in Germany).” Although residents in Vernagt now run pensions, hotels, and guesthouses since tourism such as mountain climbing and ski has become popular, they stubbornly continue the unprofitable transhumance of sheep besides raising milk cows.

This study discusses the relationship between modern tourism and local people’s ordinary lives through the transhumance of sheep (*Schafübertrieb*) in Vernagt of Schnalstal, Gemeinde Schnals of the northern part of Italy. Tourists find the ordinary event to locals like the transhumance of Vernagt as an extraordinary attraction but their participation usually happens without permission from the local people, which may result in only an interference with their work and lives. This is the example that tourists consume the ordinary lives of locals as a “pseudo-event” for their enjoyment.

* 帝京大学経済学部観光経営学科・教授
2009年3月まで立教大学観光学部・教授

Key words: 観光 (tourism), ツーリスト (tourist), 日常 (ordinary/everyday), 非日常 (extraordinary), 移牧 (transhumance), 羊 (sheep), フェアナークト (Vernagt), シュナルスタール (Schmalstal), アルプス (the Alps), イタリア (Italy), オーストリア (Austria)

- I はじめに —ツーリストと文化体験—
- II 移牧とは何か
- III 北チロルと南チロルの環境と人びと
- IV フェアナークト (Vernagt) の村びとと移牧
 - 1) フェアナークト村の環境
 - 2) ヴィーゼとヴァイデの重要性
 - 3) 国境を越える羊の移牧と羊飼いの生活
 - 4) アイスマン Eis Mann (エッツィ Ötzi) から想像されること
- V 移牧に「まわりつくツーリスト」からみえること —むすびにかえて—

I はじめに —ツーリストと文化体験—

ツーリズムを単に個人の旅行の集積としてとらえることもできるし、ツーリストとホストが出会うことによって、互いが異なる文化を認識する機会としてもとらえることができる。

また1990年代以降、国際機関などがいうように国際平和・国際理解、あるいは文化交流促進のために推奨されるとともに、巨大な地球規模の産業としてその経済効果が強調されてきた。

しかしながら、ツーリズムは旅行目的地である地域や住民に対して与えてきたインパクトという点において、この産業に対しては批判的な声が多く聞かれ、またホスト社会に与える負の社会的・文化的インパクトが指摘されてもいる(安福, 2006, p.9)。

一方、ツーリズムは生産活動ではなく社会現象であるとしてとらえることもできる。つまり、ツーリズムは個人の人生におけるひとつの“経験”であるといえるし、その経験に「楽しみ amusement を見いだしている」ともとらえることができる。本稿で取り上げる「羊の移牧」にまつわるツーリストは、その経験に価値を見いだしているといえる。

アミューズメントという言葉は、日本では娯楽施設や機器が持つ機械的な近代性をさして使われることばだが、それは同時に、機械と遊ぶ遊び方を指す意味もある。ゲーム機や遊園地の遊具は人びとが考案した遊びの仕組みを形にしたものであるから、アミューズメント amusement とは、「ひとが楽しむために開発した遊び方の仕組み」ということもできる。

本稿であつかう羊の移牧は遊びの仕組みとして開発されたものではないが、その周辺にいる人びとが、羊の移牧という生業に、第二次世界大戦後、とくに1980年代になって「勝手に楽しみをみいだした」ものである。この事象は、ある種の階層の人びとによる、ある種のアミューズメントやツーリズムの創出ととらえることができる。

アミューズメントとは、楽しいという感情と直接的に結びついている。これを「楽しみの感情」といってもよい。

成熟した社会では人びとは楽しみを得るために労働し、楽しみのために時間を消費する。同時に初期段階の享乐的なアミューズメントから、より自己啓発的なアミューズメントへと大きな価値観の変容がおこるように筆者にはみえる。その典型はエコツーリズムや農業体験であり、本稿でとりあげる羊の移牧に参加するツーリストもその種のアミューズメントを求める人びとである。

ツーリズムを「楽しみのための旅行」と規定すると、その旅行は単に旅行者が生産する旅行商品だけではなく、最近ではツーリスト自身が楽しみの対象を開発するような傾向もみられる。

つまり、「消費者が自ら楽しみを創りだし、費用をかけて消費する」のである。また国内旅行に非日常を探すことが難しくなってきたことを実感するツーリストは海外に非日常を求めることができるし、事実、こんにちでは、そうしたツーリストはめずらしいことではない。

遠藤 (2007) は以下に示すように E. Cohen (1979) の観光における経験の5つのタイプについて述べている。つまり、コーエン Cohen, E. (1979) はマッカーネル MacCannel, D.によって提示された真正性 *authenticity* の概念をもとにツーリストを類型化した。この遠藤 (2007) に加えて安福 (2006, pp. 83-84) を参考に、それをまとめると以下ようになる。

① 気晴らしモード (*diversionary*)

：娯楽を求めるツーリストをさす。ただ日常の退屈さから逃れようとする際の観光経験で、単なる気晴らし、憂さ晴らしの旅行を求めるツーリストを意味する。したがって、このツーリストは真正性 *authenticity* とは無縁である。

② レクリエーション・モード (*recreational*)

：娯楽的な色彩の濃い観光経験であるが、この経験のもとで人びとは心身の疲労を癒し元気 (*well-being*) を取りもどす。そのためこの経験は、単なる憂さ晴らし以上の再生 (*re-create*) の意味をもつ。この型のツーリストは第一の「気晴らし」に類似してはいるが、日常生活からの逃避を求めている。

③ 経験モード (*experiential*)

：自分たちが訪問した場所で、そこに生きる人びとの生活様式や価値観に憧憬の念をもち、それこそがオーセンティック *authentic* な生のあり方であると考えにいたる観光経験である。つまり、他者の生活に真正性 *authenticity* を求め、これまで見たこともない風景や人びとの暮らしぶりに引きつけられるが、そのような生活に関わろうとは思わない。

④ 体験モード (*experimental*)

：ツーリストが他者の生活に憧憬の念をもつだけではなく、実際にそこに参加し体験しようとするものである。このタイプに属するツーリストは文化人類学者に類似し、ある特定の社会に一時的に参加して、さまざまな体験を望むが、あくまでも一時的であり、自分の日常生活と比較することによ

て良い方を選択しようとする。

⑤ 実存モード (*existential*)

：単なる体験にとどまらず、自分たちの生活様式や価値観といったものを捨て去り、旅で知った他者の生活様式や価値観を永遠に自分のものにしようとするツーリストである。このタイプは巡礼者に類似し、日常の時空を超えるところにこそ、“本当の”世界があると信じ、それに対する精神的な関わりを強く求める。このタイプのツーリストは、五つのタイプのツーリストの中で真正性 *authenticity* に対するこだわりが一番強い。

安福 (2006, p. 84) によれば、コーエン Cohen, E. は、この五つのタイプのツーリストのなかで、①の“気晴らしモード (*diversionary*)”はブーアスティン Boorstin, D. J. (1964) のツーリスト像にちかく、マッカーネル MacCannel, D.の考えるツーリスト像は③の“経験モード (*experiential*)”に類似する。

またコーエン Cohen, E. (1979) は次のように考える。

これら5つのタイプのなかで中間に位置する③の“経験モード (*experiential*)”型のツーリストは疎外された現代社会に生きるメタファーとしてマッカーネル MacCannel, D. の考えるツーリストである。

本稿で取り扱う移牧を観光対象とするツーリストは、強いていえば、③または④に含まれると単純に考えることができるが、①～⑤のどのカテゴリーにも属さないとも見ることができる。

つまり、ツーリストの対象とする現象や地域には、文化体験の一つとして「目新しさ」を求めるツーリズムがあると筆者は考える。

本稿では、イタリア北部シュナルスタール Schnalstal における羊の移牧をとりあげ、その移牧を楽しみのための「文化体験」の対象とするツーリストが存在することを指摘し、観光 *tourism* と観光者 *tourist* のもつ「身勝手さ *selfishness*」を考えたい。

II 移牧とは何か

世界のかなりの地域では、厳しい気候条件の結果として家畜飼養がたったひとつの合理的土地利用としてあらわれる。それにはさまざまな形態があり、あるところでは定住した家畜飼養であり、その一つの形態が移牧である。またあるところでは遊牧である¹⁾。

移牧は低地と高地との気候の差異を利用した生業の代表である。

移牧（仏語／英語でトランスヒューマンス transhumance；移牧はその日本語訳）とは何か。

移牧とは、ラテン語の trans（across, または over の意）と humus（ground, soil, または land の意）を組み合わせた“transhumer”からきている。それは定住する人びとからみた見解であるが、「耕地、そしてブドウ畑やオリーブの畑を越えて移動する人びと」という意味である（G. Rinschede, 1988, p. 97；安田初雄, 1958）。

伝統的な移牧は遊牧と同じように年中放牧している。必要とあらば寒い季節にのみ家畜を舎飼いし、干し草を与える。移牧における家畜の所有者は定住集落（principal settlement：母村、本村または里村）をもち、そこでは農耕がみられることも

多い。定住集落以外の場所にある彼らの集落は季節的に利用されるにすぎない。

移牧の家畜は地域によって相違があるが、アルプス地域では主として乳牛であり、かなり羊もみられる（白坂, 2004）。フランスのピレネー山脈やスペインでは主に羊である。フランスアルプスには牛、羊、山羊をまとめた移牧があるらしい（R.ピティ, 1955）。イタリアのアペニン山地でも羊の移牧がみられる（谷, 1976；竹内, 1998）。ブリテン島などは羊の飼育が盛んであり、もちろん羊飼いやみられる（Bowden, 2004）。しかし移牧という形態はない。

トルコやルーマニアの移牧も羊である。

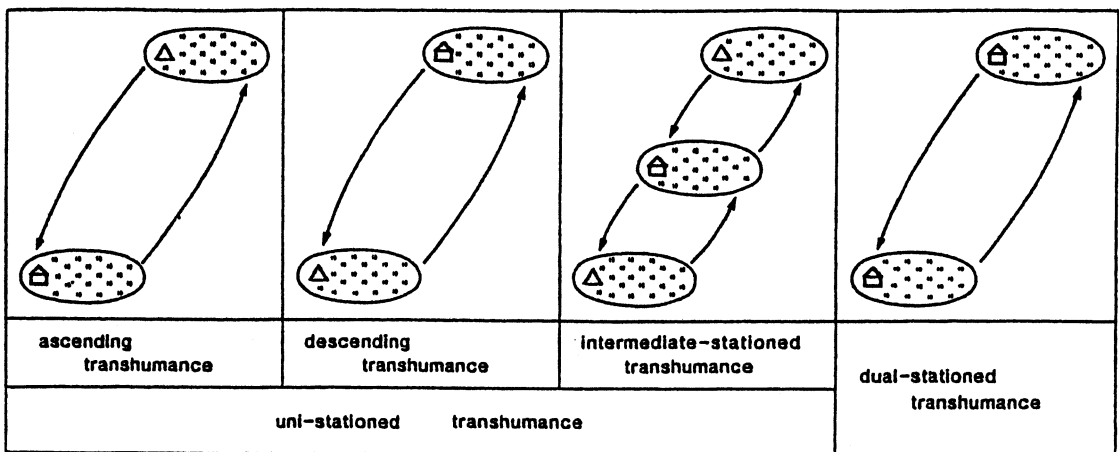
牧畜の博物館といわれるバルカン半島にも羊の移牧（小林, 1974；Matley, 1968）がある。筆者のフィールドワークによれば、スロヴェニア（Cevc, 1972）では、こんにちでも乳牛の移牧はあるが、羊の移牧はほとんど衰退してしまった。

さらに、移牧には、じつにさまざまな形態がある（Rinschede, 1988, pp. 98-99）。

移牧は、大きくみると移牧をする人びとの住居が1ヶ所なのか、2ヶ所なのかにより uni-stationed transhumance と dual-stationed transhumance の二つに類型化できる（図1）。

legend:

- △ temporary grazing settlement
- ⌂ permanent settlement



(Rinschede, G., 1988, p. 98 を一部改変)

図1 移牧の諸形態

さらに、the uni-stationed form は、移牧をする人びとの基地となる牧場がどこにあるのか、また彼らの居住地が平地にあるのか、山麓にあるのか、山地にあるのかによって基本的には次の三つの形態に分けられる。

- 1) 夏季に河谷低地にある母村から山地に家畜を垂直移動させる ascending transhumance (正移牧)。
- 2) 冬季に山間地にある母村から河谷低地に家畜群を下ろして、低地の耕地で刈り跡放牧をする descending transhumance (逆移牧)。
- 3) 山腹の村から、夏季には山地へ、冬季には河谷低地へ家畜群を移動させる intermediate-stationed transhumance (二重移牧)。

上述のように、移牧は、おもに正移牧 (ascending transhumance)、逆移牧 (descending transhumance)、二重移牧 (intermediate-stationed transhumance) の三つに類型化できる。

第一の ascending transhumance (平野部に居住する人びとの移牧：正移牧) は平野または山麓にかれらの基地となる牧場があり、夏季に山地の牧場を利用するという形態である。フランスアルプスでは移牧の 88% は正移牧である (Rinschede, 1988, p. 102)。ピレネー山脈の西部やトルコなども大部分は正移牧である。

第二の descending transhumance (山地に居住する人びとの移牧：逆移牧) は、夏季には集落の周りにある牧場を利用するが、冬季には標高の低い低地に家畜を移動させ、刈り跡放牧もするという形態である。ピレネー山脈では、かつては多くがこの逆移牧であったが、その一部は正移牧に組み込まれる傾向にある。この逆移牧はアルプスが地中海に落ち込む地域 the Alps Maritimes でもみられ、ここでは羊はローヌ河口地域で冬を過ごす。

イベリア半島中央部の山地にも、この逆移牧があった (澤口, 1998)。またバルカンのディナル・アルプス Dinaric Alps からダルマチア Dalmatia の沿岸部へ、スロヴェニアの内陸の山地からアドリア海沿岸部へという羊の逆移牧があったが、筆者のフィールドワークによれば、そのほとんどは第二次世界大戦直後くらいには消滅したものとみられる。

第三の intermediate-stationed transhumance は、上記の二つの形態を併せ持つ移牧であり、日本では二重移牧と訳されている。この形態では高地と低地の中間である山麓のようなところに彼らの居住地と牧場があり、夏季には山地の標高の高いところ (summer range, 夏营地) に家畜を導き、冬季には低地 (winter range, 冬营地) に降ろす。この二重移牧はピレネー山脈の西部地域をのぞくイベリア半島各地でみられた。筆者の聞き取りによれば、ポルトガルの移牧はすでに消滅した。しかしスペインには残存しているが、かつての二重移牧は正移牧に組み込まれる傾向にあるらしい。アメリカ合州国西部の山々 the American West では、二重移牧や正移牧が卓越している (齋藤, 2009)。

ルーマニアには 1990 年くらいまでは羊の伝統的な二重移牧がみられた (白坂, 2004; 2005 a; 2005 b; 2005 c; 2007)。しかし 2000 年代に入り伝統的な二重移牧は大きく変容した (白坂, 2010)。

また筆者の聞き取り (2004 年) によれば、スロヴェニアでは、現在、乳牛の正移牧しか存在しないが、かつては羊の二重移牧があった。しかし第二次世界大戦直後くらいまでには消滅した。

上述の類型のうち、日本でもっとも知られている形態は、いわゆる ascending transhumance (正移牧) であろう。正移牧はスイスの児童文学者であるヨハンナ・シュピーリ (Johanna Spyri, 1827-1901) の『Heidi』(日本語訳では『アルプスの少女ハイジ』1880-81) の生活そのものである。ハイジ、おじいさん、そしてペーターの生活を思い出してほしい。

アルプス地域では人びとは 5 月頃には家畜を連れてマイエンに移動し、飼料用の干し草を生産しながら家畜を飼う。前述のように、マイエンは森林限界より上部にあるアルム Alm (アルプ Alp ともいう) にゆく前に利用される草地であり、彼らは夏になるとさらにもう一段高い位置で、森林限界を越えたところにあるアルプまたアルムとよばれる高地の放牧地へ家畜を追い上げる。そこで場所を移しながら放牧し、搾乳してチーズをつくる。筆者の聞き取りによれば、アルプでの放牧期間は一般には約 90 - 100 日である。

母村を離れた多数の家畜は雇用された少数の牧

夫による管理のもとに、共同放牧される。家畜は夏のおわりには河谷にある母村に下ろされる。

夏季の母村は農繁期にあたり農民は農業に従事し、冬の家畜のために干し草も生産する。

つまり、人間は山地の低い方に家畜と共に定住し、夏季になると暑気と乾燥を避けて草を得るために家畜を山地の高い方にある草地に追い上げて飼育し、チーズを生産する。秋になって降雪の季節が近づくと定住集落（母村）にもどる。Hugo Penz (1988)によれば、「アルプス高地の天然の草地利用に基礎をおく家畜飼養（アルムヴィルトシャフト *Almwirtschaft*）」というの *mountain pasture farming* の特異な形態であるという。

移牧は、一見、見事なばかりにエコロジカルな均衡を具現しているが、その内実は「平野」の農村における農業生産力の発展、都市経済の変貌にもなつて衰退すべきものであるとする見方（竹内, 1998）もある。しかしながら、上述のごとく、移牧という事象は現在でも世界のあちこちにみられる。ピレネー山脈のペルデュ山（フランス）の移牧はユネスコの世界遺産になっている。が、それにツーリストが「まわりついている」かどうか、寡聞にして筆者は知らない。

本稿でとりあげるアルプスの南麓に位置するイタリアの南チロル *Südtirol* を含む地中海をとりまく地域、つまり南ヨーロッパやアジアの西側の地域、そしてアフリカのアトラス山脈北側の地域は暑く乾燥する夏と湿潤な冬によって特徴付けられる。この地中海地域には、いわゆる地中海式農業といわれるさまざまな農牧業の形態がある。

地中海地域の移牧は自然環境と穀物栽培との関連で発達してきた。その特徴は垂直的移動が少なく、水平的な移動距離が長いことである。地中海地域の移牧では灌木や疎林のなかの草を求めて家畜を 300 - 500 km も移動させることも珍しくはない。そのため長距離の移動に耐え、チーズの原料となるミルクも生産する羊やヤギが移牧用の主要な家畜として利用されてきた。

さらに、乾燥した気候やテラロッサのために牧草の生産性が低く、牧草を求める範囲が広がることも地中海地域における移牧の重要な特徴のひとつである。

地中海地域の一般的な移牧は夏移牧とよばれるものである。家畜は冬季には休閑地（穀物畑）に放牧（いわゆる刈り跡放牧）、飼育され、高温と乾燥により草の枯れる夏季には涼しい山地に移動して山地の草地に放牧される。この形態はアルプスの南斜面やピレネー山脈で発達してきた。しかし灌漑施設の整備により従来の休閑地に果樹栽培や野菜生産が取り入れられたり、あるいは灌漑ができるようになったりして穀物栽培が専門化することにつれて、この種の移牧は衰退の傾向にある。

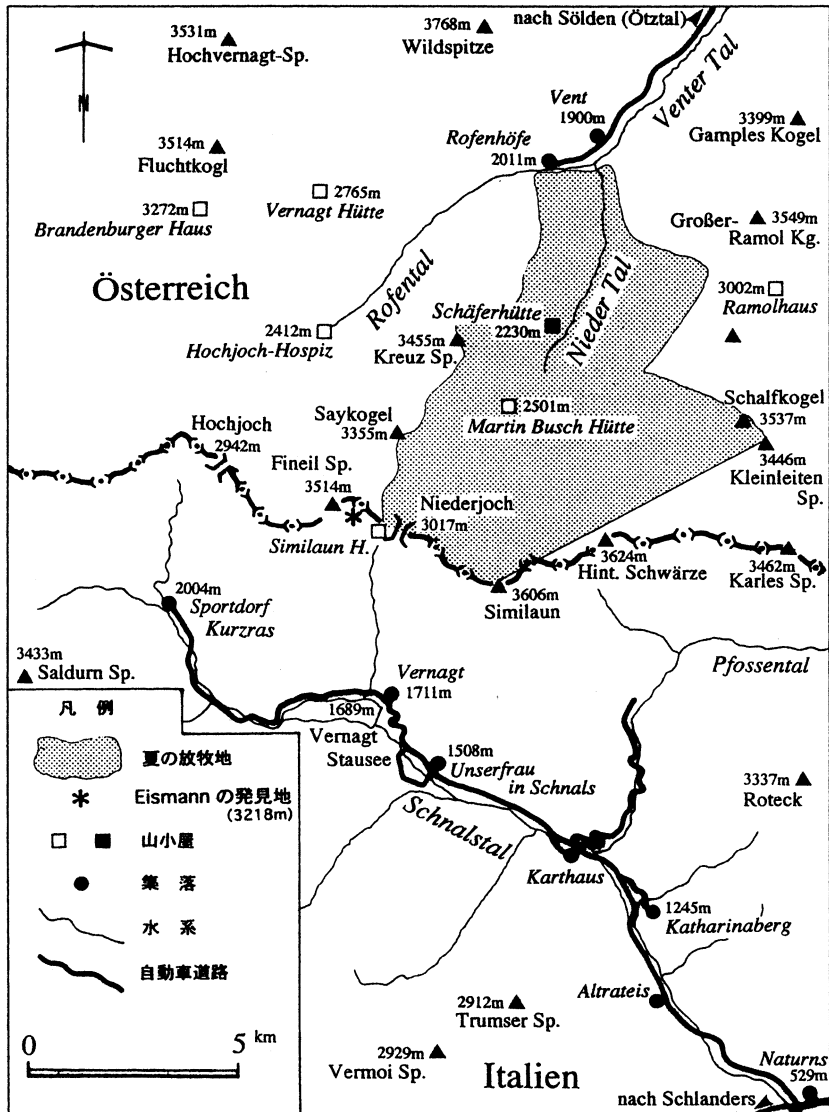
しかしながら、筆者のフィールドワークによれば、今日でも移牧はこの地域の生業のひとつとして重要な役割を果たすものとして残存している。

本稿では、アルプスの南斜面の谷（イタリア北部の南チロル：*Südtirol*）のシュナルスタール *Schnalstal*（行政的には *Gemeinde Schnals* に含まれる；図2）のなかのひとつの集落であるフェアナクト *Vernagt*（標高 1,711 m）の伝統的なヒツジの移牧をとりあげ、山村における暮らしと観光との間の相互関係を通して観光 *tourism* および観光者 *tourist* の身勝手さ *selfishness* を考えることにする。

ところで、世界の移牧地域で移牧という生業形態が、どの程度ツーリズムに利用されているのか、寡聞にして筆者は情報を持ち合わせてはいない。たとえば、もっとも最近の研究で、また優れた民族誌でもある渡辺和之（2009）の研究でも観光との関係は読み取れない。また先にあげた世界遺産になっているピレネー山脈のペルデュ山における羊の移牧にツーリストが「まわりついている」かどうか、寡聞にして筆者は知らない。

しかしながら、ここで取り上げるシュナルスタールの羊の移牧は、筆者の見聞した限り、アルプスでももっとも観光と強く結びついた一つの事例ということができる。

このシュナルスタールの地域はアルプスの南側斜面にあるが、地中海性気候地域に含まれるので、基本的には冬季に雨（標高が高いのでここでは雪）が降る（図3）。また6月には雨の日が多く、降水量が多い。これは、この谷では例年のことである。また高温の時期である夏は著しく乾燥するため一部の灌漑地を除き牧草が枯れてしまう。そこ



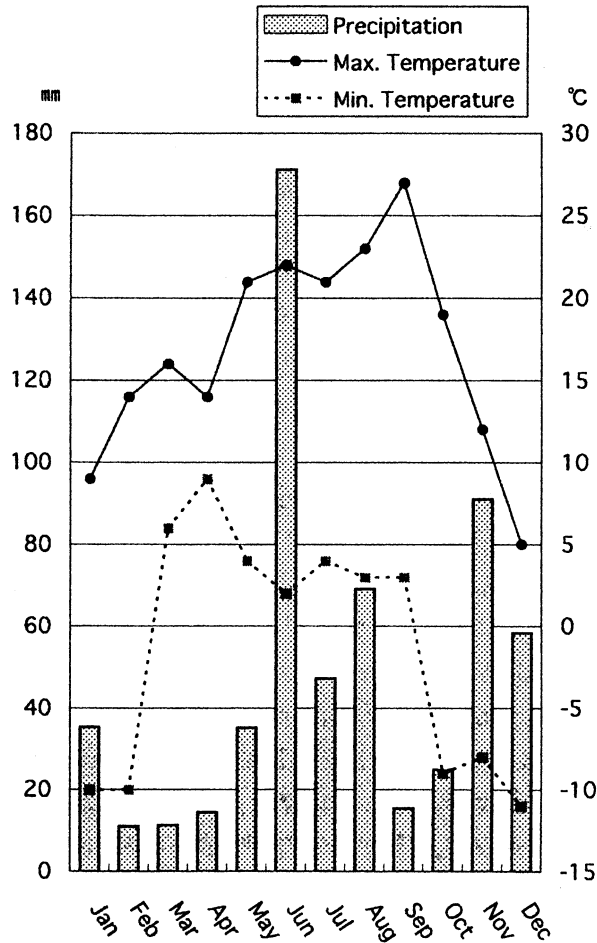
(筆者原図)

図2 フェアナークト村(イタリア)とフェント(オーストリア)の位置

で、夏になるとシュナルスタールの河谷低地を離れ、アルプスの尾根の南側で良質な牧草の得られる山地の牧場(イタリア側)へとヒツジを移動させ、約3ヶ月そこに滞在する。そして例年9月中旬にはイタリア側にある母村に戻る。この羊の往復にツーリストがまとわりついている。

Ⅲ 北チロルと南チロルの環境と人びと

第一次世界大戦におけるオーストリアの敗戦によりサン・ジェルマン条約(1919年)によって北および東チロルはオーストリア領となったが、チロルのなかでもっとも農業生産性の高い、アルプスの南側、いわゆる南チロルはイタリアに割譲された。こうして南チロルはイタリア語でアルト・アディジェ・トレンティーノ州 Alto Adige-



(1998 Statistisches Jahrbuch für Südtirol,
Autonome Provinz Bozen/Südtirol により作成)

図3 フェアナークト村の気候

Trentinoとよばれるようになり、今日に至っている。

このような事情によりアルプスの尾根がオーストリアとイタリアの国境となった。「チロルはひとつ」という強固な民族意識をもつ誇り高い人びとはオーストリアのチロルとイタリアの南チロルに分断された。しかし住民の大半はオーストリア系で、今日でもドイツ語を話しており、彼らは自治権の拡大を求めた歴史ももっている。

今日でもチロル州の州都インスブルック中央駅の駅前広場は南チロル広場 Südtirolplatz と呼ばれている。またインスブルック大学ではイタリア領

となってしまった南チロルからの学生にオーストリア側の学生とまったく同じ条件で奨学金を与えている。ウィーンにも Südtirolerplatz がある。本稿で取り上げるシュナルスタール Schnalstal における聞き取りのなかで南チロルを「イタリア」とでも表現しようものなら、土地の人々の多くは「いいえ、南チロルでしょう」などと言い替えるのである。

このようにチロルの人びとの一体感は今日でも強固に維持されている。

19世紀後半の南チロルでは標高が低く河谷に沿い、比較的平坦なところには鉄道や道路の交通

路が整備され、経済的に発展の基盤がつくられた。そして市場向けの農作物の栽培が盛んになり、経済活動が活発になり、人口は増加した。しかし、シュナルスタールのように1,500 mを超える標高の高い集落はアルプスを穿つ峡谷の最上流部にあり、交通の便にも恵まれず、いわゆる隔絶山村として牧畜を生業として大きな変化はなかった。もうすこし広くこの地域をみると、19世紀後半からは若者を中心にアルプスの北側の地域への出稼ぎが盛んであった。しかしシュナルスタールでは、ほとんど出稼ぎはなかった。

通婚圏には、その地域の地域性や歴史が感じられるものである。

1960年頃までのシュナルスタール Schnalstal は、隔絶された山村であったから婚姻もほぼ集落、ひろくみても谷筋に限られていた。信じられない話ではあるが、筆者の聞き取りによれば、シュナルスタールの北東のエッツタール（オーストリア）では1831年からの20年間結婚が禁止された時代がある。アルプス地域に含まれる村々は人口増加をゆるさないほどの、文字どおりの寒村であった。

こうした環境のなかで徒歩交通の時代にあっては、3,000 mの峠が障害となることはなかった。筆者の聞き取りによれば、第二次世界大戦後でもフェアナクト Vernagtとフェント Vent は、3,000 mのアルプスの尾根をはさんで通婚圏であった。筆者に山を案内してくれたアロイス・ピルパマー Alois Pirpamer（1941年生れ、フェントにある Hotel Post の経営者）の妻もフェアナクトからニーダーヨッホ Niederjoch（標高3,017 m, Similaunpass²⁾ともいう）を越えて1964年に嫁いできた。

ところで、いつ頃からは明確ではないが、アルプスの南斜面に位置する南チロル Südtirol の山地住民は3,000 mの尾根を越えて、アルプスの北側斜面に夏季の間、羊の移牧をするようになった。

シュナルスタールは古くからアルプスへのアプローチが比較的容易な谷として知られていた。したがって、シュナルスタールは地中海性気候のイタリア側の夏の乾燥を避けて、アルプスの北の斜面に草を求めた羊たちの重要な通路となっていた。

古くからフェアナクトの牧畜民は夏季の間の数ヵ月間、シミラウン峠を越えてフェント側に移牧に来ていた。そのもっとも古い記録は約800年まえのものである。しかし、後述するエッツィ Ötzi の発見によっても明らかのように、この移牧は記録にのこる年代よりも古いものであることは容易に想像できる。そして、峠の南側のシュナルスタール側から北側に移牧に来ていたなかから、その地に住み着いた人々がいたのである。それがフェントのむらの起源であろう。

フェントのむらの人々に聞くと、むらの起源は12世紀であるという。これは記録に裏付けられたものであり、フェントの集落はエッツタールにおける村々のなかでは、もっとも古い起源をもつと考えられる。

南チロルの谷間に住んで羊を飼育する人びとにとっては尾根の北側にあるアルムは魅力的であったにちがいない。したがって、チロルがオーストリアとイタリアに分離され、南チロルがイタリア領となっても南チロルの人びとがオーストリア側に持っている伝統的な牧場地役権 Weiderecht はそのまま維持されることになった。

このため、毎年、イタリア領となった南チロルから約2,000頭の羊がニーダーヨッホ（シミラウン峠）を越え、フェント（オーストリア）側に移牧される。

北イタリアでも標高が700 - 800 m位までの地域はリンゴやブドウの実る豊かな地域であるが、このシュナルスタール Schnalstal は1,500 mを超える高冷地で、例年10月初旬には初雪が降り、根雪が消えるのは4月上旬である。したがって牧畜にしか生業を見い出しえなかった地域である。

しかしながら、オーストリア側のチロルであるエッツタール Ötztal の各集落も、さらに上流のフェントやローフェンホーフエ Rofenhöfe（標高2,011 m³⁾）も、またイタリア領になった南チロルのフェアナクトを含むシュナルスタールの各集落も、今日ではスキーや登山などの観光によって潤うようになっている。このために羊の移牧のもつ地域的な、そして生業としての意味も大きく変わってきた。

IV フェアナークト Vernagt の村びとと移牧

1) フェアナークト村の環境

この羊の移牧をするのはイタリアの南チロルに含まれ、アルプス山麓に東西に細長くのびる氷河の谷であるシュナルスタール Schnalstal (Gemeinde Schnals) の最奥の集落のひとつであるフェアナークト Vernagt (標高 1,676 m) の農牧民 (全 21 戸, 2001 年) である。

羊の移牧は今日でもアルプスのあちこちにみられるが、このシュナルスタールの移牧がもっともよく知られている。羊の移牧は氷河のない谷にゆくので観光的に有名な氷河のあるような谷には羊の移牧はみられない。

フェアナークトが記録に現れるのは 13 世紀とのことだが、さらに 200 年以上はさかのぼることができるだろうと地元の人びとという。13 世紀には、すでに南向き斜面で穀物栽培をしていたらしい。

その後 1326 年に修道院ができて人びとがあつまってきた。村びとの話によれば、ダム (1948 年建設開始) ができる前のフェアナークト村は牧草地が広がり、また実り豊かな穀物畑がみられた。

かつてこのフェアナークトはオーバーフェアナークト Obervernagt とよばれ、隣村のウンザーフラウ Unsefrau がウンターフェアナークト Untervernagt とよばれていた。Obervernagt の大部分は湖の中に沈んだ。

筆者の聞き取りによれば、1960 年代になってから 40 km ほど下流のヴェノスタ谷 Val Venosta (ドイツ語では Vinschgau) のメラン Meran (Merano, 標高 302 m) に小さなタンクを積んだトラックでミルクを出荷できるようになった。それまではチーズやバターをつくったが、ほとんどは自家消費だった。バターやチーズを下流の都市までは売りに行かなかった。なぜならダム工事が続いていたときには、その関係者によくバターやチーズが売れたのである。

また当時はこの村の住民にとって牛と羊は同じような価値をもっていた。牛 (シュナルスタールの乳牛の多くは *Tirolergrauvieh* という種類で、体

毛は灰色) は貴重な食料を提供してくれた。乳脂肪分は平均 3.8 くらいである。また羊からは衣料の材料としての羊毛や皮がえられた。糸を紡ぐ作業は女性の仕事であった。一般にズボンには皮でつくった。

フェアナークトを含むシュナルスタールの村々では、1970 年頃まではライムギ、オオムギ、エンバク (カラスムギ)、ジャガイモを栽培していた。ライムギはパンにし、オオムギはスープにした。エンバクは牛の飼料で、ジャガイモは牛の飼料にもした。冬の野菜としてキャベツを栽培した。ライムギは 1960 年代には減少し、1970 年代には栽培はみられなくなった。その後乳牛の飼育が専門化し、羊の移牧の生業としての意味はうすれてきた。

ライムギやオオムギの畑も灌漑したので水の得やすいところをムギ類の畑とした。細い水路をつくり畑に水を入れた。したがって、山から水を 2 km も引くこともあった。水の権利は個人が持っていることもあり、数人で持ち合う場合もあった。後者の場合には、順番に畑を灌漑した。ムギには 2 週に一度くらいの割合で灌漑した。

この地域ではライムギがもっとも重要な穀物 (corn) だった。

ライムギは、10 月に播種し、翌年の 4 月に収穫し、6 月に収穫した。収穫のあとは再び耕したが、ここには牛や羊を入れなかった。オオムギは 4 月に播種して、9 月に収穫した。ここも刈り跡を耕し、牛や羊は入れなかった。ムギを栽培していた頃は春には谷全体が黄色につつまれた。これらの麦稈を用いてベッドをつくった。

1975 年頃までは水車を利用して製粉し、各家庭でパンを焼いた。どの家にもパンを焼く釜があった。3 ヶ月分くらいのパンを一度に焼いた。また 1980 年くらいまでは小麦粉を入手してパンを焼いていた。これらの穀物畑は現在ではすべてヴィーゼ Wiese (採草地) になっている。現在では彼らは母屋の周辺で短い夏を利用してカブやキャベツを自給用に栽培するにすぎない。

採草地に散水するスプリンクラーは 1955 年ころから使用されはじめた。この採草地には天気の良い日には 1 日に 2 時間ほど必ず散水する。

したがって、夏季の乾燥する季節でも飼料としての草を入手できるようになり、乳牛の飼育が増えた。例年5月末から10月まで、つまり雪が降るまでこの散水をする。1-2日で8haほどの牧草地に散水する。灌漑用の水は夏季には足りない。水は集落より200mほど高い場所から引いてくる。この水は飲用でもある。配水は1960年代には太いゴム管になったが、それ以前は樹木をくり抜いた木管（凹形）で水を山腹から引いてきて畑に入れた。谷を歩けば、あちこちにまだこの木管が残存しているのを見ることができる。

2002年現在、各農家では乳牛を平均7-8頭飼育（最多数でも20頭）している。乳牛1頭当たり1haのヴィーゼ Wiese（採草地）が必要であると地元の農民は考えている。したがって、この地域では乳牛の飼育数を聞けば、その農家の保有している牧草地の面積がおおよそわかる。また各農家で平均30頭くらいの羊を飼育しているが、150頭飼育している農家もある。

このフェアナークトの集落のある場所には1957年にダムができた（1948年建設開始）。このダムは発電を目的としており、発電所は南のフィンシュガウ（イタリア語では Val Venosta）のナテュルルス Naturns にある。このダムの高さは64m、堰堤の長さは480mである。湖面の標高は1,689m、その幅は約700mで、湖の面積は約126haである。貯水量は220万 m^3 である。このダムをつくるために、旧フェアナークトの26戸のうち8戸が家屋の移動を余儀なくされ、湖面よりも高いところに居を構えなければならなかったが、8戸のうちの4戸はフィンシュガウなどに農地を購入して移住し、現在でもそこで農業を続けている。

このダムの建設が始まる前のフェアナークトの平均的な農家の土地所有は以下のものであった。耕地：2ha、ヴィーゼ（採草地）：6ha、ヴァイデ（放牧地）：20ha（多くの家族はこのうち5haを失った）、森林：20ha。

ダム建設のための補償金は、屋敷地、耕地、採草地、放牧地、アルム、森林地に分けて計算された。それぞれの家族は1,500万リラから3,000万リラの間で補償をうけた。当時の情勢を客観的に

判断できる立場にあった地元の人物によれば、妥当で十分な補償であったという。

このダム工事は長くかかった（ほぼ20年）ので出稼ぎをしなくてもよかったと地元の人びとという。このあと、さらに上流のクルツラス Kurzras にスキー場ができたので冬季にはそこでアルバイトをしている農民もいるし、農閑期には標高の低いフィンシュガウのナテュルルスにゆき果樹の手入れのアルバイトをする農民もいる。このほか自分の所有する山林で伐採し、建材や薪として販売することを冬の仕事としているひともある。

2) ヴィーゼとヴァイデの重要性

フェアナークトにおける土地利用には、以下の四つの類型がある。

(ア) 耕地 (Äcker)：かつて1970年頃まではオムギやエンバクを栽培しており、各家庭でパンを焼いていた。トモロコシは栽培できなかった。これらの穀物畑は、現在ではすべてヴィーゼになっている。野菜畑は、家屋の近くにあるが、クラインガルテンのような小規模なものになっている。

(イ) 牧草地 (Wiese)：牧草を刈り取るところで、新たに造成するときには、Hafer（エンバク、カラスムギ、オートムギ）やKlee（クローバー）などの種子を播種する。しかし、一度播種すると草は自然に生えるので、種子を改めて蒔くことはない。Haferは根が強く、一度播種すると1-2年で強くなり、毎年よく育つ。牧草地には、表土が流れ出さないように樹木の枝などを土地の傾斜と直角に交わるようにおいたりする。毎年、雪が消える5月には採草地にはウシの糞を撒く（これ一度のみ）。採草は一回目が6月下旬、二回目が8月中旬-9月上旬の二回で、それぞれ約4週間かけて、谷底から上方に向かって草を刈り採ってゆく。2日間干して草小屋に保管する。乳牛の飼育数は、基本的にはその家族の所有する牧草地の面積によって決まる。おおよそ採草地

(ヴィーゼ) 1 ha あたり 1 頭である (この値は西ヨーロッパの酪農地域と同じである)。

- (ウ) 放牧地／荒地地 (Weide)：「手入れをしない牧草地」という認識である。
- (エ) アルム (Alp/Alm)：山にあるヴァイデという認識で、ヴィーゼに比べれば草は少ない。Alm というのは 1992 年までの表現で、1993 年以降は Alp というようになった。アルムには、一度に 1 週間ほど三回羊を入れることが可能である。フェアナークトのアルム組合の構成員は羊の移牧の組合員と同じであるが、フェルナークトのアルムの多くは個人所有である。

ところで、採草地は、英語で meadow、ドイツ語圏では Wiese である。また放牧地は英語では pasture、ドイツ語圏では Weide という。放牧地は集落の周辺に広く分布し、共有地であることもおおい。牧畜の民は採草地と放牧地を厳密に区別する (白坂, 2005 a, pp. 89-90)。

このように、家畜を飼養する牧畜社会では一般的に家畜を放牧する牧場と冬季のための干し草をつくるために草を刈る採草地を明確に区別する。例外的な時期、つまり最終回の採草をした後に、そこに家畜を放牧することをのぞけば、原則としては採草地に家畜を放牧することはしない。

日本の英語の辞書をひくと、pasture も meadow も、どちらも牧場と書いてあることがあるが、これは正確ではないし牧畜社会の重要な認識のひとつを見逃している。つまり、牧畜民は採草地 (meadow や Wiese) は草を生産する耕地であり、ここに家畜を入れて放牧することは原則としてしない。また家畜の放牧地である Weide や pasture を一般的には「荒地地」と訳したりするが、本来は「手入れをしない牧草地」である。ドイツ語圏では谷の奥で岩の露出した放牧地を、とくに Weide-Wiese ということがある。

英語の有名な詩に、ときおり “sheep’s in the meadow” とあるのは、韻を重視したがゆえの間違いである (T. Jordan, 1973)。家畜は pasture (Weide) では草を食むことが許されても、一般的には meadow (Wiese) に放牧されることはない。

くりかえすが、原則として牧民は採草する前の採草地 (meadow や Wiese) に家畜を放牧することはない。もちろん、採草したあとのヴィーゼには一時的には放牧することを見かけることがある。

ところで、今日ではフェアナークトでも採草地が灌漑されるようになり、乳牛の飼育が中心になったが住民は乳牛の移牧はしない⁴⁾。一般的に言えば、西ヨーロッパの平地では、ひと夏に採草は少なくとも三回は可能であるが、この辺りでは牧草はひと夏におおくても 6 月下旬と 8 月中旬の二回しか収穫できない。フェアナークトよりも若干標高が高い、西隣のシュポルトウドルフ・クルツラス Sportdorf Kurzras (標高 2,011 m) では一回 (6 月中旬) しか採草できない。このクルツラスには 8 戸の農家があり、ここでも近郷から羊 (約 1,200 頭) を集め、オーストリア側のローフェンタール Rofental に移牧をしている。クルツラスもフェアナークトと同じような形でヴァイデ (約 730 ha) を利用している。ちなみに、クルツラスという地名は、このあたりの気候が厳しくて草の丈があまり高くないことを意味し、“短い (クルツ)” と “草 (グラス)” が結びついた地名らしい。牧草を刈り取れる回数は牧畜を営むヨーロッパやアルプスの村々の豊かさとも関係する。

こうした村人の活動は、いわゆる日向斜面が中心である。したがって、筆者の観察によればフェアナークトの森林限界は南向き斜面では約 2,400 m、北向き斜面では約 2,100 m になっている。

北イタリアでは、時代をさかのぼればさかのぼるほど、また標高が高ければ高いほど羊や山羊が重要であった。

フェアナークトの移牧のための組織はアグラールゲマインシャフト・ニーダータール・アルプ・シュナルス Agrargemeinschaft-Niedertal-Alpe-Schnals という。かつては Niedertal-Interessenschaft-Schnals といっていた。地元の人たちは一般的には Niedertal-Interessenschaft または Alm-Interessenschaft といっている。

古くから近年まで羊の移牧の権利を持つフェアナークトの農牧民は 26 戸であったが、1960 年、1970 年、1990 年、1992 年、1999 年に各 1 戸ずつ、

計5戸が減少した。5戸のうちの4戸は村の外に移住し、そこで営農している。また1戸は村内に留まっているが、移牧の権利は売却し、ペンジョン（民宿）を営んでいる。

フェアナークトに残るヴァイデ権利年代記（Cronik über die Schalsler Wiederechte im Ötztal）によれば、すでに1415年にフェアナークトの呼びとは住民による羊の移牧協会（インテレッセンゲマインシャフト Interessengemeinschaft）をつくり、今日ではオーストリアであるニーダータール側の定住集落フェントとの間に6月中旬から9月中旬までの夏季の3カ月間の6,000 haのヴァイデ権利契約（バイデンレヒツフェアトウラーク Weidenrechtsvertrag）を交わした。

チロルでは利用されている他人の土地を通過して森林限界のうえにまで羊を上げる既得権としての移牧などの慣行の多くはマリア・テレジア Maria Theresia (1717-1780)の時代に文書になったそうである。それに比べるとフェアナークトのフェントとのヴァイデ権利契約の締結は時期がたいへんにはやい。

フェアナークトの移牧に関する権利としての株（アンタイル Anteil）は全部で1,653株である（2002年）。筆者の聞き取りによれば、古くは各戸とも同じ持ち株数であったらしいが、今日では各戸の持ち株数は同数ではなく、また売買もされる。

アンタイルを手放そうとするのは羊の飼育をしない農家である。また前述のように1960年以降このフェアナークト村から低地の村に移住する農家もあり、アンタイルを手放すことがある。

アンタイルが売りに出たときには分割して各農家が少しずつ購入する慣行がフェアナークトにはある。ひとつの家族にアンタイルが集中しないように買い手が決められる。また地元に住む農家以外には売らないとの不文律がある。

この移牧組合アグラールゲマインシャフト・ニーダータール・アルプ・シュナルス（Agrargemeinschaft-Niedertal-Alpe-Schnals）のアンタイルを持っている牧民の間には、お互いに強い絆がある。フェアナークトのあるひとは、それをBrüderschaft（強固な仲間意識）と表現した。

筆者が聞き取りをした結果によると、アンタイルの売買は1株あたり邦貨40万円弱（2000年6月）になるので、ひとつの家族が所有しているアンタイルをすべて手放すと、これまでの例では少ないときでも邦貨で280万円、多いときでは約500万円にもなる。したがって通常はこれを協会員が分割して買い取る。

前述のように、この移牧に関する協会の当初の構成員は26家族であったが、2001年現在は21家族になっている。また21家族のうち8家族はアンタイルを所有してはいるが羊の移牧をすでにやめた（2000年）。

フェアナークト村の移牧を取り仕切るアルプマイスター Alpmeister（組合長、単にObmannということもある）は5年に一度の選挙で選ばれる。マイスターとはフェアナークトでは移牧組合（Agrargemeinschaft-Niedertal-Alp-Schnals）の組合長をさし、ここ30年以上にわたり同一人物が務めている。移牧をする日時を選択、集まってきた羊の数の記帳や確認、移牧による利益の配分などのすべてに組合長が権限をもつ。

3) 国境を越える羊の移牧と羊飼いの生活

ニーダータール Nieder Tal（Niedertalalmということもある）への羊の移牧を地元の人びとはシャーフウーバートウリープ Schafübertrieb という。

また6月にニーダータールアルムに羊を追上げるのをシャーフアウフトウリープ Schaufauftrieb auf Niedertal, 9月に羊がニーダータールアルムから母村のフェアナークト村に帰ってくるのをシャーフアットウリープ Schafabtrieb von Niedertal という。

羊がニーダータールアルムに放牧される期間は、例年6月中旬から9月中旬までのほぼ100日である。

毎年6月中旬に3日がかりで近郷のむら（主としてシュナルスタールの南側のフィンシュガウの谷）からも羊（約1,200 - 1,500頭）がやってくる。たとえばフェアナークトから54 kmも離れたラザ Lasa（ドイツ語ではLaas, 標高869 m）、シランドロ Silandoro（Schlanders, 標高722 m）、22 km離れたナテュルノ Naturno（Naturns, 標高

529 m) などから歩行してくる。1995年頃からはトラックで羊を輸送する(フェアナクト以外からくる羊の約30%)こともみられるようになったが依然として伝統的なスタイル(歩行)もみられる。

移牧組合(Agrargemeinschaft-Niedertal-Alp-Schnals)を構成する21家族のもつ羊は現在では約600頭であるが、かつてはもっと多かった。この移牧のために近郷から集められる羊はフェアナクトの羊も含めて例年ほぼ1,800-2,000頭になり、2,000頭は越えない。

移牧にあたり、組合員以外は預ける羊1頭につき10,000リラ(557円, 1999年)を組合に支払う。またEU農業委員会は羊1頭につき5,000リラの補助を農家に与えている。

ニーダータールアルムNiedertalalmは6,000haあり、筆者の観察によれば、ここでの森林限界は2,200mくらいにある。ニーダータールアルムを維持するために樹木の伐採などはしない。多くは森林限界を超えているので伐採の必要はないという。樹木があっても、その多くは雪崩に押しつぶされている。

2000年6月14日に筆者がSchafauftriebに同行したときは、ほぼ1,800頭の羊が、体力に合わせて5つのグループに分けられ、早朝の午前3時35分に約25人の牧童(トライバーTreiber)と牧羊犬に導かれ、それぞれのグループで長い列をつくりシミラウン峠を越えてニーダータールのアルムを目指した(羊の移動そのものについては、小谷, 1991に詳しい)。移牧組合を構成する各家族は原則として牧童をひとり提供することになっているので、若い娘が牧童として加わることも珍しくはない。羊の首につけたベルの音が暗闇の山々に遠くこだまして凄惨な音になる。

筆者の経験では、このSchafauftriebに同行する観光客はほとんどいない。

羊の誘導は牧人がやるが、牧羊犬の役割(全部で5-6頭)も大きく、羊が1列になって進むように誘導する。牧羊犬は、その趣味をもった住民が飼育している。牧人は、「ピーピッ」と鋭い口笛を有効に使い、羊をコントロールする。羊は草を食みながら進む。牧羊犬は、羊が、あるときに

は広く散開して進むように、またあるときには群れがばらばらにならないように隊形をととのえる。さらにあるときには羊が1列になって進むように誘導する。

先頭をつとめる牧童はロックシェーファーLockschäfer(誘導牧童)といわれ、最後尾をつとめる牧童をトライプシェーファーTreibschäfer(駆りたて牧童)という。これから3ヶ月の間にわたり放牧の面倒を見る羊飼ひ(ヒルテ, Hirte)がトライプシェーファーをつとめるのがフェアナクトの移牧組合の習わしである。

先頭の群れは7時にはニーダーヨッホ直下のカール(Kar⁵)標高約2,600m)の底に到着した。ここまではフェアナクトから約4kmの緩やかな上りである。しかしここからは、シミラウン峠(3,017m)との標高差400mの急斜面でジグザグの約2kmの急な登りとなる。牧童と牧羊犬により統制された羊は、ほぼ1列になって進み、8時30分にはニーダーヨッホに達した(ほとんど例年同じような時刻になる)。

6月とはいえシミラウン峠は降雪にみまわれることも多い。このとき(1998年6月12日)は前日から大雪で、シミラウン峠の周辺には50cmもつもった。さいわいなことに、移牧の当日(6月13日)は雲ひとつない快晴になった(写真1)。しかし、風が強く、筆者の温度計はマイナス2℃であった。強い風が吹いていたので、体感温度はたいへん低かった。

筆者の同行した1998年のSchafauftriebではそのようなことは起きなかったが、シミラウン峠越えでは、ときには吹雪で羊が窒息死することも稀ではない。最近では1979年6月に、この峠の下の急斜面で7時間も雪と格闘した。同行した牧童達は全員無事であったが雪崩で70頭もの羊が死亡した。

羊も牧童たちも、この峠で一服(約10分)する。この間に仔羊が母親の乳房をさがす。

ツーリストは早朝からシミラウン峠を越えるこのような羊の群れを極寒のなかで見守り、その後、多くのツーリストは羊の列の間に挟まれながら峠からフェント(オールドトリア側)に下りた。牧童はツーリストたちに羊の列の間に割って入らない

よう、また羊からみて斜め後ろに位置取りをするように厳しく注意を繰り返した(写真2)。羊のまえに人間が立ちふさがると羊が立ち止まってしまうからである。

羊はニーダータールを下って放牧地をめざし、そして移牧小屋(シェーファーヒュッテ Schäferhütte, 標高2,230 m)を中心に6,000 haに散開し、このあたりで3ヶ月間を過ごす。

筆者の聞き取りによれば、羊がシミラウン峠を通過するのをシミラウン・ヒュッテに宿泊して見守る観光客が例年100人程度はいる。6月中旬は、すでにヨーロッパのバカンスシーズンが始まっているのではあるが、筆者はこうした羊の峠越えを見ようとする観光客の数に驚いた。多くの観光客は、ほぼ2時間におよぶ羊の峠越えを見守るだけであるが、前述のように観光客のなかには羊とともにシミラウン峠をオーストリア側を下る人びともいる。

羊を誘導してきた牧童たちはマルチン・ブッシュ・ヒュッテ Martin Busch Hütte (2,501 m; ドイツ山岳会の所有)に宿泊し、次の日の早朝にはフェアナクトに戻って行く。残された2,000頭の羊は、ひとりのヒルテ Hirte (羊飼い)によって管理される。羊飼いをフェアナクトではヒルテというが、オーストリアでは一般にはシェーファー Schäfer という。

2003年現在のヒルテは1994年から毎年引き受けている。彼はフェアナクトの隣の集落ウンザーフラウ Unserfrau (標高1,508 m)に居住しており、自分でも約30頭の羊を所有し、この移牧に預けている。

ヒルテは移牧小屋に寝起きし、2,000頭もの羊を約3ヶ月にわたってひとりで管理する。ヒルテはかつて二人だったが、1990年からは彼ひとりである。なぜなら移牧組合としてはヒルテに支払う賃金をおさえたいのである。ヒルテの賃金は6月から9月の3ヶ月間で7,000,000リラ(邦貨約39万円, 1999年9月)である。

以下は、彼の話である。

「ニーダータールアルムにきた羊は6,000 haを自由に移動して草をはむ。移牧小屋に住むヒルテの主な役割は6,000 haの全域を巡回し、散開して

いる羊2,000頭に1週に一度程度の割合で定期的な塩を与えることである。6,000 haのなかに約20カ所の塩を与えるポイントがあり、ひとまわりするのに、ほぼ1週間はかかる。夜間の羊は、もちろん路傍で休むのであるが、3カ月の間に羊が死亡に至るような事故はほとんどない。このあたりで飼育されている羊の種類はチロルヤマ羊(Tiroler Bergschaf)⁶⁾で、体毛は白だけではなく、真っ黒の羊もあり、丈夫なのが取り柄である。

毎日、朝は8時に起床し、谷ごとに羊を見回り、昼にはいったん移牧小屋に戻る。午後羊を見回るのが常である。小屋は太陽電池を利用して電灯は使えるがテレビはみられない。1週に一度くらいの割合でシミラウン・ヒュッテまで食料や手紙を受け取りにゆく。

イタリア側からの風は湿っており、雨を運んでくるから羊にはよくない。北からの風は乾燥しているので歓迎される風である。私が管理するこのアルムではアルムに火をいれることはない。だいたいアルムに火を入れることは禁じられているはずである。だからタバコの火にはことのほか気をつける」。

ところで、前述のヴァイデ年代記やアルプマイスター(組合長)の保管する記録によれば、このニーダーアルムに放牧する羊の数は昔から2,000頭をこえない。たとえば、1968年1,700頭、1970年1,400頭、1990年代は1,800-1,900頭である。この記録を見せてもらったところ、ここ200年くらいでは、例外的に一度だけ1940年に2,200頭だった。

これを参考に単純計算すると、羊1頭当たりのヴァイデの面積はほぼ3 haになる。羊や山羊の草の食べ方は環境破壊になりやすいといわれる(正田, 1987; 中里, 2001)。フェアナクトの人びとは森林限界をこえた山地の気候や土壌にもとづく草の生産量を考慮して、この程度、つまりヴァイデの面積3 haに対して羊1頭の放牧数が限界であることを、多分、体験的に知恵として獲得したにちがいない。

羊が帰郷するのは例年9月中旬である(1999年は9月13日だった。筆者はこれに同行した)。

9月5日にフェアナクトから4人の牧童が羊を

迎えにきて、マルチン・ブッシュ・ヒュッテに泊まり、13日の帰郷の日の早朝まで、ほぼ1週間かけて約2,000頭の羊をこのヒュッテの周辺に集めた。迎えにきた牧童の賃金は100,000リラ（約5,570円）／人／日である。

羊の帰郷の当日には、男女を問わず関係する家族のなかの若者や子どもたちも手伝いにあがってきて、羊といっしょにフェアナークトに帰って行く。

移牧の当日、フェントやマルチン・ブッシュ・ヒュッテから羊といっしょにシミラウン峠に登る観光客も若干みられる。フェントからだ羊飼いのSchäferhütteまで2時間、さらにマルチン・ブッシュ・ヒュッテまでは1時間はかかる。そのうねマルチン・ブッシュ・ヒュッテからシミラウン峠までは旅行案内書などには2時間と書いてあるが、ほぼ3時間はかかる。

山をおりる前日までに羊はマルチン・ブッシュ・ヒュッテ（標高2,501m）の周辺に集められる。羊は草を食みながらシミラウン峠を目ざし、峠に近づくときには一列になっている。このとき春に生まれた仔ヒツジのなかには歩行がままならない仔もいる。牧童に加えて多くの観光客が手をかす風景もみられる（写真3）。このSchafabtrieb von Niedertalにおける羊の先頭は11時30分（1999年は9月13日）にシミラウン峠を越えた。

筆者の観察では、シミラウン・ヒュッテに泊まって、この峠で羊の帰郷を見守る観光客はじつに多い（約100人）。しかしながら、これらの羊とともにシミラウン峠からフェアナークトに下山する観光客は例年ほとんどいないという。この1999年の羊の下山に同行したのは筆者と筆者の友人たち3人（すべて日本人）のみであった。

羊の列のしんがりは山羊6頭である。3ヶ月にわたり移牧小屋でくらす羊飼いに乳を供給するために同行していたものである。

羊の先頭は牧童とともに11時30分にシミラウン峠から下山を開始し、途中で30分の休憩し、牧童が昼食をとり、15時15分に多くの観光客が待ち受けるなかを母村のフェアナークトに到着した。

フェアナークトに到着した羊は、まずは大きな

牧柵に入れられる。そして預けた人びとは各人が自分の羊を見つけて小さな牧柵に入れる。これを子どもたちも手伝う。移牧に出すときに識別できるように、羊には背中などに赤、黒、青などさまざまな色をつけてある。また羊の耳に思い思いの切り込みをいれてある。それにしても2,000頭の羊のなかから自分の羊を見つけ出すのであるから家族総出の作業となる。この識別作業は、えんえんと夜半までかかるのが常である。自分たちの羊がそろった家族からトラックに乗せたりして帰郷して行く。

フェアナークトに帰ってきた羊は降雪がみられるまでの間、牧草地を刈ったあとのヴィーゼや本来の放牧地であるヴァイデに放牧され、冬季は舎飼いされる。

放牧されるとき羊のオスとメスの比率は1：9くらいで、種付けはすべて自然にまかせている。普通、羊の妊娠期間は150日くらいであり、この羊は早春の3－4月に1頭または2頭（まれには3頭）の仔を生むが、秋（9－10月）にも生まれることがある。10頭のメスを所有していると平均で年間25頭くらいの仔がとれる。春に生まれた仔はイースター用に、また秋に生まれた仔はクリスマス用にラムとして販売される。

羊の寿命は10－12歳くらいであり、しかし10－12歳くらいまで仔取りにつかうと市場には出せないで、そのときには自分で屠りサラミやフライシュにする。

春と秋の二回、下流のボルツァーノ Bolzano（ドイツ語では Bozen）に羊の市がたつ。牧民はメスとオスを適当に売ったり買ったりして、所有する羊を交配させる。オスが4頭いれば2頭は毎年交換する。

南イタリアの羊は搾乳するが、北イタリアのこのあたりで飼われているチロルヤマシツジ（Tiroler Bergschaf）からはミルクは採れない。剪毛は3月と9月の二回である。

羊の尾は生まれてから10－20日くらいして切り取られるが、全部は切り取らないで引きずらない程度の長さに切断する。筆者はどのようにしてそのような長さにするのかを問うたことがある。答えは「羊を美しく見せるためだ」とのことだった。

このチロルヤマ羊は丈夫な羊で、病気で死亡するようなことはほとんどないが、放牧中に落雷で死亡することが、たまにはあると住民はいう。

冬になると協会員全員による集会アルムレヒスング Almrechnung がもたれ、放牧の利益から羊飼い (Hirte) や牧童 (Treiber) などのコストを差し引き、残高を21人の協会員で分けるが、ひとりわずか数百円の収入にしかない。

乳牛の飼育に加え民宿などの観光業も盛んになり、かつてはたいせつな生業であった羊の飼育は今日では経済的な価値がほとんどない。それでも1990年代に入り EU は羊について5,000リラ／頭／年の補助金を与えるようになった。

現在、羊毛の商品価値もほとんどないが羊毛は羊1頭から約2kgとれる。そこで家族のなかの女性がソックスを編んだり、祖母が自ら10頭分の羊毛を紡ぎ1着のセーター (Janker) をつくり、子や孫に与えるような慣行は続いている。

「羊の移牧はフェアナクトの住民の誇り (Stolz) なんだ」とみんなが言う。

登山やスキーなどの観光が盛んになり、ペンジオン・ホテル・民宿などを経営するようになってフェアナクトの住民は乳牛を飼育する一方で、経済的に価値がなくなった羊の移牧をかたくなに継続している。

アルプス地域の山地住民の健全な価値観と伝統に畏敬の念を忘れないシュナルスタールの人びとに頭が下がる思いがするのは筆者のみではないだろう。

4) アイスマン Eis Mann (エッツィ Ötzi) から想像されること

1991年はアルプスの氷河から遺体が6体も発見されたためずらしい年であった。これは1952年から1990年の間に発見された氷河遺体数と同じ数である (シュピンドラー, 1994, p. 13)。

この1991年9月19日、これまで述べてきたシミラウン峠からわずかに西に位置するハウスラプヨッホ Hauslabjoch (標高3,218m) の真下の融けた氷河のなかから衣服を伴った奇妙な遺体が発見された。偶然ではあるが、筆者はこの日ここから15km離れたところで山登りをしていた。

この遺体は紀元前3300年から3200年、つまり現在からほぼ5300年前 (新石器時代後期) に生きていた人物であることが最終的に明らかになった。そしてこの遺体は、のちに“エツターのひと”というような意味の「エッツィ Ötzi」と名付けられた。

エッツィの発見された場所は、その後の詳しい調査でアルプスの尾根からわずかにイタリア側であったため現在はボルツァーノ Bolzano の南チロル・アルト・アディジェ考古学博物館に展示されている。

エッツィは現在から5300年前にこの山中で遭難したミイラだった。

彼はその服装や持ち物も、ほぼ完全に当時のままであった。考古学者は彼は羊飼いであったと結論付けた。エッツィは羊を連れてこのハウスラプヨッホを通過しようとして何らかの事故に会い、氷河のなかで凍りづけになったのである。

エツタールに人影がみえるのは、きわめて早い頃であった。それは紀元をはるかにさかのぼることであつたらしい。

紀元前6000年くらいになると、アルプス周辺は、いわゆる新石器時代にはいる。古代オリエントから伝播した農耕と牧畜は、この頃にはすでに中部ヨーロッパまで浸透していったらしい。ヨーロッパの新石器文化は中部ヨーロッパからアルプスの山麓に向かって南下したことがわかっている。

一方、地中海側からもアルプスに向かって居住圏が広がってきつつあった。アルプスの北側、つまり現在のオーストリア側にくらべれば、アルプスの南側は、いわゆる地中海性気候で夏は高温で乾燥するが冬は温暖である。つまり、アルプスの北側の地域にくらべればアルプスの南側は気候に恵まれていたのである。今日でも、この地域の東にあるブレンナー峠 (1,371m) を北から南に越えればゲーテ J. W. von Goethe (1749-1832) ではなくとも、アルプスの南側の地域の農業的な豊かさに圧倒される。

したがって、アルプスの北側にくらべれば人間は南側の方に早く居住し、北に向かってアルプスの谷筋まで入り込んでいったであろうことは想像にかたくない。

シュナルスタールを東南に下り、アディジェ川に沿う東西にのびるヴェノスタ地域（フィンシュガウ）は、南チロルの穀倉地帯で今日でも農耕が盛んである。現在では農業は果樹栽培が中心となり、リンゴがたわわに実る豊かな地域で、東部ではブドウも栽培されている。このフェノスタ地域には新石器時代の遺跡がたくさん発見され、はやくから人間活動がみられた。

アルプス周辺では新石器時代には、すでに小麦や大麦に加えてアマ（亜麻）、ケシ（罌粟）、マメ類（エンドウ）の栽培がみられた。またイヌ、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ブタなども飼育されていた。肉、乳、革はもちろん、バターやチーズもとれるウシは新石器時代でも重要な家畜であった。

羊と山羊は、有史以前から放牧により飼養された。また夏季に乾燥する地中海性気候を考えれば、標高が高くなればなるほど、乾燥につよく、放牧にむいた羊や山羊が重要性を増すと考えられる。南チロルでは標高が高くなれば気温が低くなり、草の生産量は減少するから比較的小規模の群れでも広い放牧地（pasture）が必要になる。

羊飼いは群れを連れて故郷の村からかなり遠い土地まで放牧を行ったので、何週間も、あるいは何ヶ月も家を離れることがあったと思われる。有史時代に入ると、その距離は数百 km に達することもあった。雪の降る地域では冬になると羊飼いは群れを連れて比較的暖かな放牧地へと向かった（シュピンドラー、1994、p. 319）。つまり、夏季に居住地を離れて羊を飼育する移牧は有史以前から地中海をとりまく地域ではみられたのである。

ローマは青銅器時代の移牧の通り道に位置していた集落から発達したといわれる（Jordan, 1973, p. 232）。

筆者らの聞き取りによれば、フェント Vent は 1224 年のある古文書に、はじめて“Vende”にある集落として登場してくるが、それ以前には夏の牧場となっていたらしい。また 1280 年の地元の古い文書には、ローフェンホエーフェ Rofenhöfe（標高 2,014 m）の農場（Schwaighöfe）が現われる。さらに 1320 年の古文書にはフェントの農場も現われる。

ローフェンタール（ローフェンの谷）やフェン

タータール（フェントの谷）では、積雪がみられないのは、年間にわずか 4 ヶ月のみである。フェントは、チロルにおける常住集落としてはもっとも標高の高いところとして、またローフェンは農耕の高距限界地として知られている。筆者らが地元で入手した資料によれば、フェントの地名が古文書に最初にあらわれるのは、前述のように 1224 年で、フェントは「セナレス（シュナルス）のフェント」と呼ばれていた。またフェントというのは、ドイツ語で「風」という意味である。氷河の影響をうけた深い U 字谷のローフェンタールとニーダータールの合さるところにフェントはあり、谷間で風のつよい場所であるらしいことを思わせる地名である。エッツタールの最奥にあり、観光集落として知られるオーバーグルゲル Obergurgl,⁷⁾（標高 1,930 m）も南からアルプスの峠を越えてきた人びとが住み着いたが、フェントより 200 年遅い 1400 年ころであるといわれている。

エッツィの発見と彼についてのシュピンドラー（1994）の著作は、われわれに多くのことを想像させる。

エッツィは、おそらく羊とともにこのハウスラブヨッホに来たのである。当時でも今日と同じように地中海側（南チロル）が乾燥する夏季には 3,000 m の峠を越えて羊飼いが羊とともにオーストリア側に移牧にきたのである。そこには豊かな草があった。2,000 m 以上の標高のところ、つまり森林限界よりもうえのところ（こんにちの森林限界はほぼ 1,800 m）は、その頃もすでに草原であったのであろう。

オーストリア側の春の雪解けは遅く、また冬が来るのもはやかった。今日と同じように彼ら羊飼いは 6 月にやってきて、本格的に冬の訪れる 9 月には地中海側に戻ったと思われる。エッツィは、この帰路に遭難したのであろうと推測される。ひとりで数百頭もの羊を、ほぼ 3 ヶ月間管理していたエッツィにとって故郷へもう少しのところまで来たのである。おそらく、その年はエッツィの予想を越えて積雪を伴った強い寒波が早くやってきたのであろう。彼は 3,000 m の稜線で滞在を余儀なくさせられ、その間に事故にあったのだと思わ

れる。

研究者はエッツィの携行品の詳細な分析から彼の故郷を新石器時代のヴェノスタ地域（フィンシュガウ）であるとし、さらに死亡時期は9月から10月であると推定した（詳細はシュピンドラー、1994）。また彼は、その出で立ちから羊飼いだっただけで専門家も推定した。筆者らのフェアナークトにおける聞き取りによれば、エッツィの発見された Hauslabjoch（標高 3,218 m）は、かつてはフェアナークトの人びとによって移牧に利用されたルートのひとつであった。まことにフィールドワーカーとしてのロマンをかきたてられる話ではある。

ともあれ、エッツィは、われわれにじつに多くのことを教えてくれたのである。

V 移牧に「まわりつくツーリスト」からみえること —むすびにかえて—

シュナルスタールのフェアナークト村の移牧をながながと説明してきたのは移牧の文化的な価値を理解できなければ本論の主旨を理解できないからである。

地元の人びとは「羊の移牧はフェアナークトの住民の誇り（Stolz）だ」という。こんにち、この移牧は生業としての価値をまったく持っていない。しかしながら住民の確固とした意志のもとに維持されている。

筆者は純粋に羊の移牧への興味から、このフェアナークト村に接近したのであるが、多くの観光客が、この移牧に「まわりついている」事実少なからず驚かされた。

1998年6月11日から6月14日の羊の移牧での筆者の経験を書いておく。

1998年のフェアナークト村からの羊の出発は6月13日早朝だとの知らせを地元から得ていた。そこで6月11日、筆者はフェント村に入った。筆者は12日シミラウン峠の山小屋に泊まり、早朝に登って来るであろう羊2,000頭を待ち受ける計画だった。ところが夕方からはひどい降雨があり、雪交じりになった。

6月12日は早朝から大雪が降り続き、フェン

トは20cmも積もった。このような天候では筆者は羊の移牧は延期されるだろうと予測したが予定通り羊は出発するとの連絡をうけた。このときになって、筆者は、この移牧を見学に来たヨーロッパ人9人がこの村のホテルに宿泊していることを知った。この羊の移牧をツーリズムの対象にしている人びとがいることに驚いた。またそのホテルのオーナーが、この9人（オランダ国籍4人、ベルギー国籍5人）を案内して雪の中をシミラウン峠の山小屋まで行くと聞いたので筆者もこの一行に加えてもらい、激しい降雪の中を7時間かけてシミラウン峠のヒュッテについた。

このシミラウン小屋には、すでに60人を超える観光客が宿泊しており、すべては羊の移牧の見学に来たのだという。

1998年の6月13日は快晴となり、羊は予定通り峠にきた。

多くの観光客は雪の峠を越える羊の列を3時間にわたり見守るだけである。一部の観光客は羊の列が途切れるのをみて、羊の列の間に入り、オーストリア側のフェント村に向かって下山する。牧童は観光客に羊の列の直前には立たないように注意を与える。

一方、筆者の同行した1999年の羊の帰郷は9月13日だった。

筆者は前日の12日にシミラウン峠の小屋に泊まり、この峠を越える羊の最後尾についてフェアナークト村におりた。「羊の移動を峠で眺めるだけのツーリスト」（約90人）はいても、羊といっしょに羊の母村であるフェアナークトに下りるツーリストは、筆者らの日本人以外にはいなかった。

この日、フェアナークト村では近郷や都市部から多くの観光客が羊を出迎えた。筆者の見たところでは500人はくだらなかった。

羊の帰郷の日は現在では小さな祭りが催される。牧草地（Wiese）のなかにビールや食べ物のお店がでる。シュナップスを飲み、アコーデオンが奏でられ、ツーリストもいっしょになり羊の帰郷を楽しむ。「羊が太って帰ってきたからうれしい」と村の人びとはいう。この羊の移牧は近郷では季節を演出する重要な行事になっている。

ツーリストをめぐる分析だけでは観光を充分に

は説明できないであろう。観光研究には地域住民やツーリストの対象とするものの分析も重要となる。

現代においては、このフェアナクト村の移牧のようにツーリストによって地域の特徴が見いだされ、それがツーリズムの対象となることもある。つまり、地元の人びとがそれをとくに望まなくても「ツーリストのまなざし *tourist gaze*」の対象となることもあることを示している。

多くのツーリストは、この移牧の文化的な価値を認識してはいたもの、ここに記述したようなフェアナクト村における移牧の内容や学問的な価値をたぶん知らないであろう。しかしツーリストはそれを「まなざしの対象」としてしまうのである。

アーリ Urry J. (1990) は、通常、観光は日常 (*ordinary/everyday*) と非日常 (*extraordinary*) との二項対立から生じると述べている。この羊の移牧とそれにまわりつくツーリストをみると、もちろん、観光とは非日常を求めて一時的に出かけることであり、またその経験は非日常 (*extraordinary*) であるといえる。

しかしツーリズムとは単にそれのみではなく、つまり、観光のみを意味するだけではなく、「目新しさを求める」人びとそのものでもあり、ツーリズムとは「目新しさ」と同義語となることもあると筆者には思える。

観光は「疑似イベント」の最たるもので、その経験はメディアを通して予め仕組まれたものである (Boorstin, 1962) とする考えもある。

しかしながら、本稿のシュナルスタールにおける羊の移牧の例にみるように、観光の対象となるものは決してイベントとして「仕組まれたもの」ばかりではない。つまり、ツーリストの「まなざし *gaze*」の先にあるものは旅行者により組織化され、創られたイベントばかりではない。

この移牧に同行するツーリストには偶然の出会いがあり、いわゆる「本物」の移牧を経験できるのである。この場合、ツーリストは「能動的な観光客」であるといえよう。

シュナルスタールの羊の移牧は、ごく最近までは産業化され、組織化された、いわゆる近代観光

とは無縁の存在であった。最近になってツーリストにより観光の対象として見いだされたものである。どちらかといえば、この羊の移牧に「まわりつくツーリスト」は、「未知なるものを知りたい」という原初的経験、言い換えれば、「人間の純粋な好奇心を求めている人びと」のように筆者にはみえる。

つまり、この羊の移牧に「まわりつくツーリスト」をみると、彼らは一方的にレジャーに真正性 *authenticity* を求めるというのではないようである。また日常 (*ordinary/everyday*) からの逃避としてのレジャーをしながらも、浅薄で擬似的で、パッケージされたレジャーとは無縁であるようにもみえる。

しかし、一方では彼らは「骨の折れるやっかいな仕事を好んでしているようにみえる」ので、彼らは本来の *traveler* といえるだろう。

この羊の移牧に「勝手に」参加するツーリストは明らかに羊の移牧を営む人びとの領域を侵犯している。現代のツーリストは移牧という地元の人びとの営みさえも「消費の対象」としてしまう。

ツーリズムにおけるツーリストの「まなざし」は、ツーリストのものばかりではない。したがって、今後は、この羊の移牧を営む人びとの「心情」からの分析も必要となる。

謝 辞

筆者は、このフィールドワークにおいて多くの方々にお世話になった。

フェアナクトの羊移牧組合のマイスターである Konrad Götsch さん、その息子の Hermann Götsch さんにはことのほかお世話になった。Konrad Götsch さんは30年以上にわたり移牧の組合長を務めており、移牧に限らずこの谷の歴史などについてもご教示をいただいた。Hermann Götsch さんには、フェアナクトからニーダータールへの羊の移牧に同行させていただいた。この移牧の羊飼 (Hirte) をつとめている Fortnat Gurschler さんには移牧小屋で長い時間にわたり話を聞かせていただいた。

またフェントでは Alois Pirpamer and Familie Pir-

pamer (Hotel Post および Similaun Hütte の経営者とその家族), Bianca Klotz (Tourist Office, Öztal Arena-Vent), Mathias Scheiber (Gasthaus Elisabeth の息子) などの方々にお世話になった。とくに Alois Pirpamer さんには、フェントからシミラウン峠のヒュッテまで大雪の中を7時間もかけて案内していただいたこともある。

このほか Karl Laterner (Kulturverein, Schnals), Maria Wilhelm (Tourismusverein, Schnalstal, Südtirol), Christoph Kneisl (Gemeindeamt von Sölden), Johann Rainer などの方々にも長い時間ころよく聞き取りに応じていただいた。

2009年に鬼籍にはいつてしまった Emeritus Prof. Dr. Karl A. Sinnhuber (Wirtschaftsuniversität Wien) には、あるときはグリーンツィングのホイリゲで、またあるときはドロミテの山の中で、じつにさまざまな情報をいただいた。

2003年にリスボン大学地理学教室に籍をおいていた池 俊介さん(早稲田大学・教授)にはポルトガルでスペインとの国境の山地を案内していただいた。呉羽正昭さん(筑波大学・教授)には移牧に関する文献について多くのご教示をいただいた。親しい友人である鷲山恭彦さん(前東京学芸大学学長)には通訳をお願いし、お互いに知的好奇心を満足させることができました。

中央アジアの天山山脈に規模の大きな移牧があることを指摘し、そして羊が一列になって氷河の上をこえてゆきたいへんに印象的な写真を提供してくれ、筆者の研究意欲を刺激してくれたのは我が畏友 岩田修二さん(立教大学観光学部)でした。そのおかげで、2011年夏から4年計画でパミール高原 the Pamirs での移牧の調査が実現しました。

英語のアブストラクトは、いつものことながら韓 志昊さん(立教大学観光学部准教授)にみていただいた。

ひとりひとりの顔を想い出しながら、ここに記して感謝いたします。

注

- 1) 移牧と遊牧は厳密には区別しかねるという研究者もいる(安田, 1958, p.55)。しかし、一般には居所を一定

にしない、つまり定住集落をもたない放牧を遊牧とし、定住集落をもつとする移牧と区別する。移牧は少なくとも山地と平地の自然環境を利用した家畜群の移動であるが、遊牧にはその制約がない。ただし、中央アジアの遊牧民のなかには、アルタイ山地などに登る遊牧もあるので、山との関連だけでは、遊牧と移牧を区別できない。また移牧は、一般に家族の大部分の居住は一定しており、家畜とその牧人のみが季節的に移動する。しかし、遊牧は家族全員が、家畜とともに移動する。ところが、バルカン半島には、かつては家族全員が家畜とともに移動する移牧の形態があったという。遊牧は居住が一定しないとはいえ、モンゴル民族の遊牧のように、ある部族がどのあたりに移っているかは、おおよそ定まっている。つまり、固定した居住地がないというだけであり、したがって、彼らはゲル(中国語ではパオ)とか、ユルトとよぶテントを利用する。移牧の場合には、季節により居を移す先に固定した小屋がある。

- 2) シミラウン峠(3,017 m)のCOL (col, 鞍部)にはシミラウンヒュッテがある。この小屋は南チロルのフェアナークト Vernagt とフェント Vent を結ぶアルプスを越える峠道の避難小屋として、ほぼ200年ほど前に建てられたものである。この小屋は現在では暖房が入り、食事も提供する(もちろんアルコール類も)立派な山小屋となっている。1998年6月に泊まったときには、1泊2食で500 ASだった。経営者はフェントでもっとも大きなホテルを運営するアロイス・ビルパーマー Alois Pirpamer である。
- 3) ローフェンホエーフェ Rofenhöfe (2,011 m) は、かつてはオーストリアでもっとも標高の高い耕種農業を営む村落として知られていた。しかし筆者の聞き取りによれば、年寄りの記憶でも、馬鈴薯や穀物がローフェンで栽培されたことはなかったという。現在ではサラダ用の野菜(サラダ菜, Radicio, Lolorosso, Eiskraut, Kopfsalat, Weiskohl など)を、短い夏に若干栽培しているにすぎない。一方、シュナルスタールのフェアナークトにも「ヨーロッパで一番標高の高い穀物生産地」と地元の人びとの自慢する場所(Finail-Hof, 標高1,952 m)がある。2002年現在ここには1軒の農家がある。
- 4) このシュナルスタールでも、標高の低いカルトハウス Karthaus (1,327 m) やカタリーナベルク Katharinaberg (1,245 m) の住民はプフォッセンタール Pfoßental のアルムで、5月下旬から9月中旬の間、乳牛の移牧をしている。牛飼いはメラン Meran の近郊からきており、1ヶ月100万リラ(邦貨約5万円)で雇われている。
- 5) 地形用語でカール Kar とは氷河の侵食によってつくられた凹地をいう。山頂や稜線の近くで、急斜面に囲まれ、馬蹄形をした大型の窪地のことである。湖になることもある。世界の高山では普遍的にみられる。日本でも日高山脈や飛騨山脈にある。国際的にはフランス

語のサーク (cirque) が使われることが多い。

- 6) 純粋のチロルヤマ羊の毛は白いが、ときどき黒い羊も生まれる。現在は肉用として利用するが、かつては肉と羊毛の両方を目的に飼育した。チロルヤマ羊の羊毛は平地の羊より質が落ちる。最近ではドイツから導入された *Heidschnuckle* という種類を飼育する農家もある。
- 7) オーバーグルグル Obergurgl (1,987 m) はエッツタールの源流の一つであるグルグルタール Gurgltal の最奥にある。氷河の谷を登り詰めればイタリアである。オーバーグルグルは現在でこそスキーや登山でよく知られた観光集落になったが、長い間、袋小路の寒村だった。このあたりの観光地としての発展は、ほぼ100年前の19世紀の末からである。オーバーグルグルの教会前の広場にピッカルド教授とハンス・ファルクナーの記念像がたっている。1931年5月ピッカルド教授と助手のキップファ博士はドイツのアウグスブルクから上層の気象の状態を探るためのアドバルーンに乗り、飛行をはじめた。15,781 m の成層圏に達した二人はグルグルタールの一番奥のガーグラ氷河の上に着陸した。二人は地元の農民ファルクナーにより無事救助された。このことは世界各地に伝えられ、エッツタールやオーバーグルグルの観光に大きな宣伝となったといわれている (松田, 1998, pp. 134-136)。今日、オーバーグルグルは人口約400人ではあるが、ホテルなどのベッド数が3,000もあり、最盛期には700人もの臨時従業員がやってくる。19世紀末までは、ここには6軒の農家と教会しかなかった。登山の発達とその後のスキー観光の開始により観光集落になった。第二次世界大戦後は宿泊施設やレストランも増加した。1959年にティンメルスヨッホ Timmelsjoch (2,483 m ; イタリアとオーストリアの国境) にティンメルス・アルペン道路 (最高地点2,474 m) が開通してエッツタールからはオーバーグルグルを経由して簡単にイタリア側に到達できるようになった (冬期間は閉鎖される)。Timmelsjoch の真下のイタリア側の Rabenstein (イタリア名 ; Corvara) では約1,000頭規模の羊が Timmelsjoch を越えてオーバーグルグル側に移牧にゆく (筆者らの聞き取り)。オーバーグルグルは「教会のある集落」としては東アルプスでもっとも標高の高い集落である。このことを教えてくれたのは当時インスブルック大学大学院の学生だった呉羽 正昭さん (現筑波大学・教授) だった。

文 献

- Bowden, Charles (2004): *The Last Shepherds—A Vanishing Way of Life on Britain's Traditional Hill Farm—*. André Deutsch Ltd., London, 255 p.
- ブーアスティン, D. J. (星野郁美・後藤和彦訳) (1964) 『幻影の時代—マスコミが製造する事実—』東京創元社, pp. 89-128. 原著は Boorstin, D. J (1962): *The Image; or What Happen to the American Dream*. New York, Atheneum.
- Cevc, Anton (1972): *Velika Planina—Življenje, Delo in Izročilo Pastirjev—*. Vlasto Kopač, Ljubjana, pp. 10-29.
- Cohen, E. (1979): A phenomenology of tourist experience. *Sociology*, 13, pp. 179-201. [遠藤秀樹訳 (2003): 観光経験の現象学. 奈良県立商科大学研究季報, 9-1, pp. 39-58.]
- 遠藤秀樹 (2007): 『観光社会学』の対象と視点. 須藤廣・遠藤秀樹 編著, 『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み—』明石書店, pp. 14-15.
- Jordan, Terry G. (1973): *The European Culture Area. —A Systematic Geography— Second edition*, Harper and Row, pp. 219-222.
- 小林 茂 (1974): ユーゴスラヴィアの移動牧畜. 人文地理, 26-1, pp. 1-30.
- 小谷 明 (1991): 国境を越える羊群. 季刊民族学, 15-1, pp. 42-50.
- Matley, Ian M. (1968): Transhumance in Bosnia and Herzegovina. *Geographical Review*, 58-2, pp. 231-261.
- 中里亜夫 (2001): ヤギは砂漠化の犯人か?—ヤギ飼育による農村の繁栄—. 篠田 隆・中里亜夫編, 『南アジアの家畜と環境』(文部科学省科学研究費・特定研究 (A) 「南アジア世界の構造変動とネットワーク」報告書), pp. 59-87.
- Penz, Hugo. (1988): The Importance, Status and Structure of *Almwirtschaft* in the Alps. Edited by Nigel J. R. Allan, Gregory W. Knapp and Christoph Stadel, *Human Impact on Mountains*, Roman & Liittelfield, U. S. A., pp. 109-115.
- Rinschede, Gisbert (1988): Transhumance in European and American Mountains. Edited by Nigel J. R. Allan, Gregory W. Knapp and Christoph Stadel, *Human Impact on Mountains*, Roman & Liittelfield, U. S. A., pp. 96-108.
- 齋藤 功 (2009): インベリアルパレーにおけるヒツジのアルファルファ畑放牧. 立教大学観光学部紀要, 11, pp. 25-38.
- 正田陽一郎 (1987): 『人間がつくった動物たち—家畜としての進化—』東京書籍, pp. 26-27.
- シュピンドラー, コンラート (畔上 司訳) (1994): 『5000年前の男—解明された凍結ミイラの謎—』文芸春秋社, 375 p. (原著はドイツ語で、1993年にインスブルックで出版された)。
- 澤口友彌 (1998): 『ヒツジの王国』人間社, 217 p.
- 白坂 蕃 (2004): 国境を越える羊の移牧. 梅村忠夫・山本紀夫編, 『山の世界』岩波書店, pp. 215-226.
- 白坂 蕃 (2005 a): 南カルパチア山地における羊の伝統的移牧. 地理, 50-7, 古今書院, pp. 84-99.
- 白坂 蕃 (2005 b): トランシルバニア山地における羊の移牧. 日本山岳文化学会論集, 第2号, pp. 91-102.
- Shirasaka, S. (2005 c): The Transhumance of Sheep in the Southern Carpathians Mt., Romania. Edited by Prof. Kazuko Urushibara-Yoshino, *Changing Social Conditions and their*

Impacts on the Geocology—Transhumance Regions of Romania and Slovenia—, A Project Report sponsored by the Ministry of Education and Science, Japan, No. 15401032, Hosei University, Tokyo, Japan, pp. 76–103.

Shirasaka, Shigeru (2007): The Transhumance of Sheep in the Southern Carpathians Mts., Romania. The Association of Japanese Geographers, *Geographical Review of Japan*, Vol. 80, No. 5, pp. 94–115.

Shirasaka, Shigeru (2010): Transhumance in Romania and Worldwide. Kazuko Urushibara-Yoshino ed.: *Changing Social Conditions and their Impacts on Sheep Transhumance in Romania and Bulgaria*. Project Number; 19401003, 2007–2009 Grant-in Aid for Scientific Research (B) supported by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, March, 2010, pp. 41–54.

竹内啓一 (1998): 『地域問題の形成と展開—南イタリア研究—』大明堂, pp. 140–160.

谷 泰 (1976): 『牧夫フランチェスコの一日—イタリア中部山村生活誌—』日本放送出版協会, 238 p.

ビティ, R / 奥田 彥・上野福男 訳 (1955): 『山地地理学』農林統計協会, 278 p. (原著は1936年にアメリカ合州国で出版された.)

アーリ, J. (加太宏邦 訳 1995): 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局, 289 p. 原著は Urry J. (1990): *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. SAGE Publications.

渡辺和之 (2009): 『羊飼いの民族誌—ネパール移牧社会の資源利用と社会関係—』明石書店, 368 p.

安田初雄 (1958): 移牧. 地理, 第3巻10号, pp. 54–58.

安福恵美子 (2006): 『ツーリズムと文化体験—〈場〉の価値とそのマネジメントをめぐる—』流通経済大学出版会, 192 p.

付 記

岩田修二さんに初めて会ったのは彼がまだ三重大学に勤務していたときでした。「若いけれども、(自分とは違って)しっかりした考え方をする本格的な研究者」というのが小

生の最初の印象でした。大学の助手になりたてで、自分の研究の方向もみえなかった私にとっては、じつにまぶしい存在でした。

その後、大学入試センターでいっしょに仕事をする機会があり、さらには中国・雲南省でいっしょに親しくフィールドワーク (1992年から1994年) をする機会に恵まれました。小生にとってはじつに愉快で、実りの多いフィールドワークでした。このフィールドワークでは自然地理学者としての岩田修二さんからじつにたくさんのことを教えてもらいました。フィールドで自然地理学者に景観をみながら意見を交換できる醍醐味をはじめて知りました。そして「人文地理学に造詣の深い地形学者の岩田修二」に驚嘆しました。うれしい思い出です。

ところで、1998年4月に立教大学観光学部が開学したときには自然地理学者はいませんでした。

しかしながら、たとえばグランド＝キャニオンを訪れたときに、その地形がどのような経過でできたのかを知らなければ、その地形の「観光的な」価値が理解できないと小生は思います。つまり、観光学の基礎には「自然地理学」の視点が必要であることを痛感した私は学部長であった稲垣 勉さんと観光学部人事委員会に相談して、岩田修二さんに観光学部にきていただいた。岩田修二さんが観光学部にみえて観光学部のカリキュラムはじつに厚みを増し、学生は観光学に新しい視点をもてるようになりました。

立教大学観光学部の特色である1年生の「早期体験プログラム」では、岩田修二さんといっしょにボルネオ (マレーシア・サバ州) のキナバル山麓の巡検をしました。この巡検のために岩田修二さんはその数ヶ月前にわざわざキナバル山の頂上まで足を運びました。彼の教育への取り組みのじつに厳しい態度に感動しました。これも幸せな思い出です。

岩田修二さんは、最近、東京大学出版会から大著『氷河地形学』を出版しました。今なお衰えない岩田修二さんの好奇心と学問への真摯な取り組みに、ここから敬意を表します。

白坂：イタリア北部における羊の移牧にみる“日常”と“非日常”



写真1 雪のシラウウン峠を越える羊の群れと牧童（1998年6月13日 著者撮影）



写真2 ニーダール・アルムをオーストリア側にする観光客と羊の列（1998年6月13日 筆者撮影）



写真3 仔ヒツジに手をかす観光客
（1999年9月13日 筆者撮影）